中国人に分かり易い日本語の慣用句の記述について

張 淑 華

はじめに

中国人の日本語学習者にとって、日本語の慣用句はとても難しい。私は大学で日本語を勉強していたときも教えていたときも、ずっと頭を悩まされてきた。

しかし、中国人が使っている参考書・辞書類の慣用句についての記述は、不十分だし、間違いも多い。それを頼りに学習したり指導したりすれば、正しく理解するどころか、誤った使い方を身に付けてしまいかねない。例えば、「見る影もない」について、現行の日漢辞典や慣用語辞典では殆どが「（変得・瘦得）不像様子」と説いているだけである。このような説明では間違いが起こるに違いない。

第一そのような記述では、中国語の訳語が不正確である。「（変得）不像様子」或いは「（瘦得）不像様子」は、日本語で言えば、「様子が変わった」「（痩せて）様子が変わった」「（痩せて）元の様子でなくなった」ということになるであろう。「見る影もない」について『慣用句の意味と用法』では「姿・形などがみにくく貧弱な様子」と説明されているが、そこには明らかに「見にくい」「貧弱だ」という否定的なニュアンスが含まれている。それに対して「（変得・瘦得）不像様子」は、客観的にただ「元の様子」と違っている様子を表わすだけで、そうした否定的なニュアンスはないのである。中国語の訳語として、「瘦得難看」（見窄らしいほど痩せている）「瘦得皮包骨」（痩せて皮が骨を覆うだけだ）は、もっと適切かもしれない。

いま一つの問題点は、慣用句についての説明が不十分だということである。右に指摘した事実から言うと、誰かを「見る影もない」と表現することは、その相手に対して失礼な言い方だということになる。それに対して「（変得・瘦得）不像様子」は、相手を労る気持ちを込めて言うときにも使えるので、失礼に当たる表現とは言えない。従って、「見る影もない」の説明には、否定的なニュアンスが含まれているので、目上の人には使えないなどといった、使用時の注意を添える必要がある。

こういうことから、私は中国人に役立つ、わかりやすい慣用句の記述をしなければならないと思っていた。信州大学大学院（教育学部）に修士論文として提出した「『日本語の慣用句について』――中国人学習者のために」は、そうした目的に基づく研究結果である。そこでは、多くの慣用句を効率的、組織的に学習・指導するための

方法として、宮地裕氏の『慣用句の意味と用法』（以下、『慣』と略す）に扱われた慣用句を四分類し、その分類に基づく学習・指導法の研究もした。しかし、その部分はまだまだ不十分なところが多い。

そこで、この論文では、個々の慣用句をどのように記述したら、中国人学習者・指導者にとって分かり易く、十分な知識を得られるようになるかということを、幾つかの慣用句について実際に説明してみることで、考えてみたいと思っている。それは同時に、現行の辞書類の記述の誤り・不足を訂正し、補足することにもなるのであろう。

記述の方法について

以下、この稿では、「あぐらをかく」「揚句の果て」「足が地に着かない」「足を引っ張る」という四つの慣用句について記述を試みることにするが、そこでは、次のような記述方法を取ることにする。

〔意味〕

(1) 成立ち

個々の慣用句の成立ちや原義について、然るべき辞書類の記述に依拠しながら記述する。慣用句も原義や成立ちを了解することで、意味や使い方をよりよく把握することができると思うからである。

(2) 意味

ここでは、必要に応じて、評価のニュアンスについても記述する。

〔文法〕

(1) 文型

二つ以上の文型で用いられる場合は、a、bのように並べる。また、文中で述語・修飾語などのどんな成分として使われるか、についても記述する。

(2) 文法

どんな活用形（否定・受身・使役・命令・意志・推量など）で用いられるか、どんな修飾成分（連体・連用修飾語）を取るかという二つの点を中心に記述する。

〔中国語での表現〕

(1) 中国語の訳語は、幾つかある場合は、もっとも適した順にa、b、c、dのように例示する。

(2) それらと日本語の慣用句との異同（意味、文体、ニュアンス）について記述する。

(3) 他に述べたいことがある場合は、ここに記述する。

〔学習・指導上の注意〕

学習・指導上、特に必要なことについて記述する。

一、あぐら（胡座・胡床・胡坐）をかく

〔意味〕

(1) 成立ち

「あぐらをかく」はもともと、「足を組んですわる」（『国語慣用句辞典』）という動作を表わす。その「両足を前に組んで座る胡座の姿勢が楽であることから」（『ルーツでなるほど慣用句辞典』）慣用句としての意味が成立した。

(2) 意味

慣用句としての意味は、「あるものの上にドカッとすわって、ずうずうしくかまえる。現在の地位・立場を利用（悪用）して、他者の迷惑をかえりみず、いい気になっている意」（『慣』）である。

慣用句としての表現には、否定的・批判的なニュアンスが含まれている。

〔文法〕

(1) 文型

「誰々が何々に～」の文型で、述語として用いられる。

「何々」の部分には、「権力・特権・権威・栄光・人気・安定多数・遺産」等の言葉が来ることが多く、それらを受けて「……の座に」或いは「……の上に」と表現することもある。また、「……の上に胡座をかいた行為……」のように、連体修飾の形でも使われる。

(2) 文法

『慣』には、「『あぐらをかく』は意志的であるが、行為がはっきりと瞬間に現れるものではない。自分のことで意志形『あぐらをかこう』は使われない」と述べられている。受身・使役・可能・命令形も、普通使えない。ただし、「彼はまもなく権力にあぐらをかくだろう」のように、推量の形はありうるだろう。「あぐらをかいた」「あぐらをかいていた」のように過去形や過去進行形もある。「いつまでも社長の座にあぐらをかいていられると思ったら大間違いだ」のような形で、可能を表わす使い方もある。

「いつまでも」「長い間」等の、時間に関係する語句の修飾を受けるが、連体修飾語は受けない。

〔中国語での表現〕

(1) a 濫用（職權）〔或いは利用（特權）〕 b 稳坐……（宝座） c 厚顔无耻地利用…… d 躺在（過去的）成績簿上睡大覚（或いは、吃老本）

(2) a「濫用（職權）」（或いは「利用（特權）」）は、「権力や特権等を悪用（利用）する」という意味で、批判的なニュアンスを持つ。文章語・口頭語のどちらにも使える。

b「稳坐……（宝座）」は、「……の座（重要な職・位）にあぐらをかく」という意味で、批判的なニュアンスはそれほど強くない。文章語にも口頭語にも使える。

c「厚顔无耻地利用……」は、「厚かましくて恥知らず、……を利用する」という意味で、批判的なニュアンスが強い。文章語にも口頭語にも使える。

d「躺在（過去的）成績簿上睡大覚」、あるいは「吃

老本」は、「昔の成績・業績の上に寝る」「昔の実績によりかかって生活、または仕事をしている」という意味である。そのことから、いい気になっていて努力しないことのたとえである。批判的なニュアンスを持つ口頭語である。「彼は昔の業績の上にあぐらをかいていたから、部下に追い越されてしまったんだ」は、「因為他躺在過去的成績簿上睡大覚（吃老本），所以才被部下拉下了」と訳せばいい。

このように、中国語の表現が幾つもあるから、どのように訳せばよいかは、それぞれの文脈に従って考えなければならない。文脈中に「権力」や「特権」を意味する語句があれば、「濫用職権」或いは「利用特権（権力）」でいい。「……の座（重要な職・位）」という言葉が来る場合は、「稲坐……宝座」の方が良いし、「恥知らず」というニュアンスがある場合は、「厚顔无耻地利用……」を使うべきであろう。また、「成績」や「業績」の上にあぐらをかいて努力しない場合は、「吃老本」或いは「躺在過去的成績簿上睡大覚」と訳せばいい。

〔学習・指導上の注意点〕

これは日本語独特の表現である。「『あぐら』の漢字は『胡座』であるが、『胡座』（こざ）の『胡』は中国北方や西方に住む遊牧民の蔑称で、従って胡人の坐り方の意味である。」（『慣用表現辞典』）

また「胡床」と表記することもある。「胡床」とは、昔、中国では、よりかかりと腕掛けが半円形になっていて、足を折り畳むことができる旧式木製椅子のことである。「胡床をかく」という慣用句は、その折り畳まれた形或いはその半円形からのたとえかも知れない。

「あぐらをかく」は仮名で表記することが多いが、ここでは括弧をつけて漢字も記した。読み方と書き方を同時に習得した方が良い。

「足を組んで座る」という具体的な動作を表わす場合は、慣用句ではない。その時は、「盤腿大坐」「盤腿（而）坐」と訳せばいい。

日本人は改まった場合は、きちんと正座をする。胡座をかくと、失礼になるし、傲慢に見える。特に女性は、寛いだ場合でも胡座をかかない方が良いので、要注意。

二、揚句（あげく）の果（は）て

〔意味〕

(1) 成立ち

『成語林故事ことわざ慣用句』（以下、『成語林』と略す）には、「連歌（れんが）・俳諧（はいかい）の最後の七・七を『挙句（揚句）（あげく）』という（最初の五・七・五の『発句（ほっく）』に対することば）ことから出たことば」と書いてある。『暮らしの中の国語慣用句辞典』には、「……『果て』も、同じく終わりを意味する……」とある。

「揚句」は「挙句」とも書く。

(2) 意味

「最後（挙句）」の「終わり（果て）」ということで、「挙（揚）げ句の果て」は、「『挙げ句』を強めた言葉」（『ルーツでなるほど慣用句辞典』）。『慣用表現辞典』には、「さまざまな経緯を経た結果の最後。物事の結末、最終的な事態をいう」と書いてある。「『揚句（に）・挙句（に）』だけでも同じ意味を表す」（『慣』）。

良くない・好ましくない結果を想像させるニュアンスを帯びている。

〔文法〕

(1) 文型

「……揚句の果てに（或いは「揚句の果ては」、「揚句の果てが」）、……」の形で用いられる。

意味関係としては、「前の部分である事態を述べ、後の部分で時間の経過によって生じた、さらに極端な事態を述べる」（『慣』）ということになる。

(2) 文法

活用しないし、独立して使われるので、修飾語は取らない。

〔中国語での表現〕

(1) a到頭来　b終于　c最后　d最終結局（是）

a「到頭来」は、「結局、とどのつまり」という意味で、具体的な場面ではなく、抽象的な場面、或いは長期間を経て意外な結果になる（極端な事態が起こる）場合に使われることが多い。「到頭来」だけからも、意外な結果が十分想像される。例えば、「ぼくは結婚しても子供なんて欲しくないがね。親が喰うものも喰わずに育て上げて、苦労して大学に入れてやってさ、挙げ句の果てにそむかれるのがおちではないですか」は、「我既使結婚也不想要小孩儿，当父母的舍不得吃舍不得穿地把孩子扶養成人，辛辛苦苦送他上大学，到頭来還不是落得个被抛弃嗎？」と訳せば、十分その意外性・極端な結果を表わすことができる。口頭語である。

b「終于」は、「ついに」という意味で、これだけでは良い結果かどうか推測できない、そういう意味での中性的な表現である。文章語にも口頭語にも使える。

c「最后」は、「最後（は）」という意味で、右記の意味での中性的な表現であり、口頭語である。

d「最終結局（是）」は、「最後の結果として……（だ）」という意味で、これも中性的な表現である。文章語と固い調子の口頭語に用いられる。

具体的な場面の描写に用いられる時は、b「終于」c「最后」の方が良かろう。例えば、「些細なことから口論となり、挙げ句の果ては殴り合いの喧嘩になった」は、「由一点儿微不足道的小事争論起来，最后居然撕打在一起。」と訳せばいい。

〔学習・指導上の注意〕

『成語林』では、誤用例を上げながら、次のように説明している。

「『今回の遭難者救出は、多くの人々が血のにじむような苦労に苦労を重ねた挙げ句の果てに成し遂げられたものである。』

『挙げ句の果て』は、「いろいろなことをやってみて、結局失敗したり悪い方向へ進んだりした場合に使うことばである。したがって、このようなよい結果についての用い方は誤り」。

「揚句の果て」は、このように、悪い結果になる場合にしか使わない。『日漢例解常用熟語諺語詞典』には、「さまざまにまごつき廻っても挙げ句の果ては古女房の許で幸せに今は暮らしている／到処徘徊、傍徨的結果、最后還是跑到老婆那里，現在過得挺幸福」のように記述しているが、『成語林』の説明に従うかぎり、これも正しい例とは言えない。

三、足が地に着かない

(意味)

(1) 成立ち

「足が地に着く」について、『暮らしの中の国語慣用句辞典』には「足がしっかり地を踏まえているということから、振舞や・感情・気分などがしっかりしていること、落ち着いている様子などをたとえていう場合に用いる」と書いてある。従って、「足が地に着かない」は、足がしっかり地を踏まえていないということから、振舞や・感情・気分などがしっかりしていないこと、落ち着いていない様子などをたとえていう場合に用いる、と言えよう。『慣用表現辞典』には、「足が地に着く」について、「『地に足がつく』とも言う。飛行機が着陸した時の気持ちも同じ」と書いてある。

(2) 意味

『慣』では、①「何かに心が奪われ、または、気持ちが上ずって落ち着きがなくなる状態」、②「理論・考え・計画などが現実から遊離していること」と分けて説明している。

原因について、『ルーツでなるほど慣用句辞典』には「あまりの嬉しさ」・「喜びのあまり」とあり、『すぐに役立つ慣用句用例新辞典』には「うれしくて」と書いてある。また、『慣用表現辞典』には、「足が地につく」について「興奮」と挙げてある。まとめると、「興奮」「喜び」と言えよう。

意味①も意味②も、マイナス評価のニュアンスを含んでいる。

(文法)

(1) 文型

a「誰（何）の～」・b「誰（何）は～」の形で、述

語として用いられる。

「何」には、考え・思想・気持ち・アイディア・計画（プラン）・企画案等、「人間精神活動などを示す語が来る」（『慣』）。

他に、「足が地についていない＋体言」のような、連体修飾の使い方もある。一方、肯定表現「足が地に着く」は、「～ついている」の形で状態を表わすが、連体修飾として使われる場合は「～ついた＋体言」（例：「地に足がついた発想が大切だ」）となる。

(2) 文法

「足が地につかない」は、状態を表わす表現なので、命令・意志・受身・使役・可能の形はない。「足が地に着かないようだ」（比況）や、「それを聞いただけで、足が地についたような気がする」（比況）の形では使われる。「足が地に着かないだろう」（推量形）・「足が地に着かなければ～」（仮定形）もありうる。

『慣』では、「『どれも肝心のプランの足が地に着いていない』のように連体修飾語を取る」と説かれているが、このような例はごく少ないようである。「嬉しくて」のような連用修飾語は取る。

〔中国語での表現〕

(1) a 稳不下心来①　b 心神不定①　c 心里七上八下（的）①　d 心里不踏實①　e 脱離現實②　f 不現實②

（注：①は慣用句の意味①に当たり、②は慣用句の意味②に当たる）

(2) a「稳不下心来」は、「何かに心を奪われ、落ち着かないさま」という意味で、口頭語である。

b「心神不定」は、「気がそわそわして、落ち着かない」という意味で、文章語であるが、口頭語にも使える。

c「心里（像有十五个釣桶）七上八下（的）」は、「十五個の釣瓶があって、七つ上がって八つ下がるように、心の不安定の状態・心が混乱するさま」を表わす口頭語である。

d「心里不踏實」は、「心（気持ち・感情）が落ち着かない、安定できない」という意味で、口頭語である。

a～dは、意味①に当たる中国語表現で、評価のニュアンスは含まない。

e「脱離現實」は、「何か（計画・話・考え方・思想・理論等）が現実から遊離すること」を表わす。文章語であるが、口頭語にも使える。

f「不現實」は、「現実的でない」という意味の口頭語である。

e、fは、意味②に当たる中国語表現で、この場合は、批判的なニュアンスがあって、マイナス評価である。

③　日本語では、「足が地に着かない」ことから、「心の不安定な状態」を譬えていうが、中国語では、「心」という言葉で、直接不安定な、落ち着かない気持ちを表わす。

〔学習・指導上の注意点〕

「足が地（じ）に着かない」という読み方もある。

「足が地につく」という形の例はあまり見えないが、「足が地についたような気がする」は、「覚得好像一塊石頭落了地」（石ころ一つ地についたことから、心配事が無くなったことの譬え）と訳せる。「地に足がついた発想が大切だ」は、「切合（符合）實際的想法是很重要的」と表現する。

『慣』では、「七上八下」と訳されている。この表現は、意味①の表現としてはおおよそ成り立つが、意味②の表現としては成り立たない。さらに、「七上八下」だけでは、主語がないため、何が「七上八下」なのかも分からない。意味②の訳語としては、「脱離現實」「不現實」でなければならない。「考え・思想・気持ち・アイディア・計画（プラン）・企画案」等を表わす言葉がある場合は、意味②に合う「脱離現實」「不現實」と訳し、「気持ち」「心情」などを表わす言葉がある場合は、意味①に合う「稳不下心来」「心神不定」「心里七上八下（的）」「心里不踏實」と訳す方がいいだろう。

また、中国人はこの慣用句の漢字表記から、「脚不着地」（足が地に届かずに、宙ぶらりんの状態）と憶測しがちだから注意を要する。

四、足を引っ張る（あし）（ひ）（は）

〔意味〕

(1) 成立ち不明

(2) 意味

『慣』には、「人の行為、或いは特定の状態が、他人の行為や事業、集団内での成功・地位・評価・ある事柄の実現などを意志的・無意志的に、結果として妨碍すること」と書かれている。

『成語林』には、「①他人の成功や昇進を妨げるような行動をする。②チームや集団で物事をするとき、その構成員のうちの何人かが、チームや集団にとって不利な行動をする」というように、二つに分けて書いてある。

否定的なニュアンスがある。

〔文法〕

(1) 文型

「誰（何）が誰（何）の～」の形で、述語として用いられる。

「誰（何）の」の所には、「人・組織・特定の行為・ある状態などがくる」（『慣』）。たとえば、他人とチームの成績や経済成長などがそうである。

「このチームは、いつも足を引っ張る者がいるので困る」のように、連体修飾語としても使われる。

(2) 文法

「彼が同僚に足を引っ張られる」というように、受身形がよく用いられる。能動表現では、「同僚が彼の足を引っ張る」となるが、受動表現になると、「彼が同僚に足を引っ張られる」のように、「彼の」は「彼が」に、「同僚は」は「同僚に」に変わる。また、「彼はグループの足を引っ張ってしまった」のような「～てしまう」形や「お互いの足を引っ張りあった」のような複合動詞の使い方も見られる。命令形や敬語表現はないようである。

右の例に見られるように、「誰（何）の」に当たる連体修飾語は取るが、連用修飾語は取らない。

〔中国語での表現〕

(1) a拉后腿　b影響　c連累　d妨害

(2) a「拉后腿」（似た訳語は他にもあるが、ここに表記できる漢字がないため、略す）は、「前へ進むときの後ろの大腿を引っ張る意から、後から牽制する譬え、足を引っ張る」意である。否定的なニュアンスが含まれている。口頭語で、会話の時に使われる。

b「影響」は、「影響・影響する」という意味で、否定的なニュアンスが含まれている。文章語にも口頭語にも使える。

c「連累」は、「まきぞえ・まきぞえをくわす」という意味で、否定的なニュアンスが含まれている。口頭語で、会話の時に使われる。

d「妨害」は、「妨害・妨害する」という意味である。どちらも意志と関係なく、ただ、状態・結果として人の行為・集団の行動を妨げるときに使う。否定的なニュアンスが含まれている。文章語である。

これらの表現は文体によって使い分けられる。たとえば、口頭語の「僕のせいで、皆さんの足を引っ張ってしまいました」は、「因為我的緣故，拉了大家的后腿（或いは、影響・連累了大家）」と訳せばいいし、文章語の「総需要抑制も経済成長の足を引っ張る」（『慣』）は、「抑制総需求也会影響経済増長」と訳せば良いだろう。

「拉后腿」は、「足を引っ張る」に一番適した表現であるが、右の「総需要抑制も経済成長の足を引っ張る」の例で言うと、話しことばで表現すれば「控制総需求也会拉経済増長的后腿」ともなる。b「影響」・c「連累」・d「妨害」は、「拉后腿」のような比喩的な表現ではなく、直接的な表現である。意味上も少し食い違いがあるようだが、言い換えても特に問題はない。

(3) 「足を引っ張る」と「拉后腿」は両方とも、実際の動作の表現ではなく、「足を引っ張る」（拉后腿）という動作から、人や集団の行為を妨害することをたとえていう点で、全く同じである。

〔学習・指導上の注意〕

「引っ張る」は、中国語では「拉」などの動詞に相当する。日本語の「足」が中国語の「脚」に相当すること

から推測して、「拉（后）脚」「拉（后）足」などと表現してはいけない。また、日本語の「足」が中国語の「脚」にも「腿」にも当たることを、いつも心がけなければならない。中国語では、足首以下の部分だけを「脚（足）」と言い、「脚」より上の方を「腿」と言う。もっと詳しく言うと、膝より上の部分を「大腿」、膝の下の部分を「小腿」という。ちなみに、日本語の「足が短い」は「脚小・脚短」ではなく、「腿短」である。

『日漢大辞典』の解釈では、「（為了妨害別人的工作或進歩）『暗中拉后腿』」と訳しているが、これは「（他人の仕事或いは進歩を妨害するために）こっそり足を引っ張る」という意味であるが、問題点は「（他人の仕事或いは進歩を妨害するために）」と「こっそり」の二カ所にあると思う。「……の為に……する」は人の意志でやることであるし、「こっそり」も人の意志が入っているから、結局、わざと意識的にやることになってしまう。従って、右の『日漢大辞典』の記述は間違いである。

注：①この論文は修士論文の一部を、書き直したものである。

②日本語のワープロを使っているため、中国語で使用されている略字がない。その部分には、昔の繁体字を使ったり、日本語にある似た漢字を使った。現代中国語の表記としては誤字ということになるけれども、ご勘弁願いたい。

参考文献

1 『慣用句の意味と用法』　宮地裕編　明治書院　昭和五十七年十月二十五日

2 『ルーツでなるほど慣用句辞典』　集英社辞典編集部編　集英社　一九九一年六月十日

3 『国語慣用句辞典』　白石大二編　東京堂出版　平成四年四月二十五日（２８版）

4 『慣用表現辞典』　奥山益朗編　東京堂出版　平成六年五月三十日初版発行

5 『成語林故事ことわざ慣用句』　旺文社編　旺文社　一九九二年九月十日

6 『暮らしの中の国語慣用句辞典』　吉田精一　菜師寺章明共編　集英社　昭和五十二年三月十日

7 『日漢例解常用熟語諺語詞典』　楊詘人主編　同済大学出版社　一九九一年十一月

8 『日漢辞典』　陳涛主編　商務印書館　一九五九年十一月（初版）

9 『漢日双解熟語詞典』　彭林宜主編　吉林教育出版社　一九八八年十一月

10 『新日漢辞典』　大連外国語学院《新日漢辞典》グループ編纂　遼寧人民出版社　一九七九年十月

11 『中日大辞典』増訂第二版　愛知大学中日大辞典

編集所編　大修館書店　一九六八年二月一日（初版）　一九九四年五月一日（増訂第二版）
12『日語慣用語辞典』　大連外国語学院語言研究所辞書編輯室編　江西科学技術出版社　一九八七年三月（初版）
13『すぐに役立つ慣用句用例新辞典』　現代言語研究会　あすとろ出版　一九九三年十一月二十七日
14『日漢大辞典』　陳涛主編　機械工業出版社　一九九一年八月

（本学大学院研究生）